
消失の国～誰かを探すRPG～

椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消失の国〜誰かを捜すRPG〜

【Nコード】

N0077X

【作者名】

椿姫

【あらすじ】

「お願い、僕を置いて行かないで」/ “彼女”の願いは、誰にも届かず闇に消えた。とある国の建国記念祭に招かれた国達。その国の地下に広がる大迷宮に連れ込まれた皆は魔法が使えるようになった。まるでRPGのように。最奥で、誰かの声が聞こえた。迷宮から帰ってきたイタリアの腕には水色の髪をした赤ん坊が抱かれていた。色々不明だが、世話をする事になったイタリア達。だが、突然フランスがその少女と共に失踪した。

1：古キ時ノ歌

さあさ、紡ごうか。
永劫に続くこの物語。

これは語られることのなかった裏の歴史。
これは真実であり、幻である。
信じるかどうかはお前達しだい。

これはお前達の常識を覆すもの。
それでも知りたいか？
真実を知りたいか？
ならば教えよう。
私が語ろう。

私の手を取れ。
共に紡ごう。
世界を包む、狂乱の賛歌を。

歴史を知るか？
それとも背けるか？

決めるのはお前だ。
好きにするがいい。
私はただの導き手。
世界は人が動かすものだ。

歌姫は詠う。

世界の終焉を。

2：夢ノ唄

私が見たら

あなたはどうかする？

きっと泣いてくれるでしょう。

あなたが死したら

私はきつと笑うでしょう。

どれだけ悲しくとも

あなたに 心配だけはかけたくないから。

僕を置いて行かないで。

嫌だ・・・嫌だ、嫌だよ。

怖いな。

一人は怖いな。

孤独ヒトトリは怖いな！

暗い海底じゃ、いつでも孤独が付きまといて来る！

嫌だ、お願い助けてよ！

僕を助けて!!

傍に居てよ!

置いてかないで!

カムラン!

ゲルマン!

助けて!

僕を助けて!!

ローマあ!!!!

「っ・・・?」

(なんだ ?今の)

目が覚めた。

(ここは、ウチだよ、な?)

ダブルサイズの大きなベット。
隣にはフェリシアーノが寝ていた。

(何だ・・・?)

『助けて』って言ってたか?

何から、『助けて』なんだ?)

分からない。

(女の人・・・だったよな?)

カムランって、確かじーちゃんが居た頃によく来てた奴の名前・・・

ゲルマンっつーのは、あのジャガイモ野郎の先祖だったよな・・・。

じーちゃんとも仲が良かった筈・・・。。。

それと、じーちゃんに助けを求めてた。

紀元前の誰かか?)

そこまで考え、気付いた。

「何で俺、こんな真剣に考えてんだ?」

(夢だろ?)

ただの夢・・・)

「どーしたの?にーちゃん?」

「・・・なんでもねーよ。」

おら、寝るぞ

「ヴェー・・・?おやすみー」

そう言ってフェリシアーノはまた寝た。
暗い部屋の中でロマーノはひとり呟く。

「……………ホントにただの夢なのか？」

その考えがいつまでも頭の中に残っていた。

何で、僕だったの？

どうして、僕はここに居るの？

何で独りなの？

置いてかないで！

怖いよ、

独りは嫌だよ…！

嫌なんだ……

でも、

これは僕の望んだことだろう？

僕一人を犠牲にする、

もつとも

分かりやすくして

簡単に

誰も傷付かなくてもいい。

そんな方法だろう？

違う…違うんだ！

違わない

僕はただ

さあ、行こう。

僕の を探しに。

魔力の欠片を託した、僕の愛しい。

今、会いに行く。

誰も犠牲に何かさせないから

t o b e C o n t i n u e d .

1：光ツドエバ

午前、九時半。

「お姉ちゃん。もうすぐ時間だね」

「うん。シャス、ちゃんとみんな呼んだ？」

「万事、抜かりないよ。もうすぐ皆集まる」

金髪の少女が、窓辺に座っていた自分とそっくりな少女に声をかける。

薄暗い部屋だ。

分厚いカーテンの所為で太陽の光がさえぎられているというのもあるが、何だろう。

部屋全体が薄暗い空気に包まれていた。

「ほんとほ」

少女の片割れが言葉を漏らす。

さっき「お姉ちゃん」と呼ばれていた少女だ。

「ほんとほ、あたしがローマ達から頼まれてたんだ。

けど、あたしには無理だった…

でも、あいつらなら出来るかもしれない。

ローマの子孫であるイタリア…

ゲルマンの子孫であるドイツ…

亜細亜から日本…

北の民族ロシア…

魔術の国イギリス……
あと、強いから大日本帝国とソビエト連邦を。

他は……全員は無理だろうから。そうだね……十時。
十時までに聖堂に集まった奴らを入れて、他の皆はあんたが説明して。

あたしはもう行くよ」

言うだけ言って、その少女は窓から飛び降りる。

「……………」

一人残された少女は。

「分からないよ……お姉ちゃん」

小さく一言呟いた。

午前、九時。

「ヴェー、すっごーい。おっきなお祭りだねー」

「国立記念の祭典だからな。豪華なのは当たり前だ」

「ちなみに、私達が居るのは『シャスラン大公園』と言うドーヴァ

「海に浮かぶ小さな島国です」

「…日本、誰に向かって言ってるの？」

「大きな独り言ですよ」

ニツコリ笑ってる日本。

（多分違う。）

絶対違う…！）

と、イタリアは思ったが追及すると恐ろしい事になりそうなので言わないことにした。

「おい、イタリア。屋台巡りをしている暇はないぞ。

十時までに大聖堂に来说いと言われているだろう」

「ヴェ？そんな事言われたっけ？」

「皆さん、上司から連絡があつたと思ひますが？」

「だったら、シエスタ中で聞いてなかつたであります！」

ビシツと左手で敬礼をする（本当は右手）イタリア。

「上司の言うことぐらいちゃんと聞けと何度言つたらわかるんだ、貴様は！」

「分からないであります！」

まあ、その後はドイツがイタリアをしばいて日本が宥めるといふつも通りの展開になった訳だが。

「さ、早く行きましょう。

時は金なり。

遅れて行って怒られるのは嫌でしょう？」

「ヴェー、分かったよー」

と、色々ありながらも枢軸三人は大聖堂へと向かった。

午前、九時二十分。

一方、連合（ロシア欠員）+ の方は

「何でだい！何でハンバーガーがお土産じゃいけないんだい！？」

「あいつをお前みたいに太らせる訳にはいかねえだろ、このバカア
！」

「君のスコーン（笑）よりはマシだろう！」

「何だと！」

どうやら、シヤスランへのお土産について言い争っている様子。

言い分もどっちもどっちだし、正直往來のと真ん中で喧嘩されたら
迷惑以外の何者でもない。

「いー加減にするある。お前ら」

「そうそう、お兄さんみたいな優雅に」

「黙れ変態」

「酷い！お兄さん泣いちゃうよー！」

何だこの変な組み合わせ。

「フーか、さつきから気になってたあるが、フランス。」

お前その子供どっから攫って来たあるか？」

中国が指差したのはさつきからフランスと手を繋いで、物珍しそうに祭りを眺めてる十歳くらいの少女だった。

「攫って来たって…」

お兄さんはそんな事しないよ。

この子は『オルト』。俺のち北部、ベルギーとの国境に位置する未承認国家だよ」

そこで、初めて少女は中国達をちゃんと見た。

「初めまして。」

聖オルトレアン教国ですう。

世界で三番目に小さな国ですよお」

「お前は国じゃないでしょ」

「国になるもん！」

カナダさんは認めてくれてるもん！」

「ダメ。俺は認めません」

何だか親子の様に会話している二人。

「ちっせーあるなあ、お前。そんなちっこいまま国になったら、あつという間に他国に攻められてお終いあるよ？」

「終わりませんよお」

意外にしつかりした口調だった。

「子供だからって、舐められてたら…」

ニッコリ笑った。

「逆に滅ぼしてやりますう」

その黒い笑みに中国は真顔になる。

「……………そうあるか。」

じゃ、寝首をかかれねえ様に我は油断しないようにするあるよ

「賢明ですう」

今はもう、普通の少女の笑顔だった。

「パパ。もう行かないと間に合わないんじゃないですかあ？」

フランスに話を振る。

「え、ああホントだ。」

ちよつと、二人ともホントに止めないと置いて行くよ？」

それから少し経ってやっと二人は喧嘩を止め、連合国は大聖堂へと向かい始めた。

午前、九時。

場所は皆が集合場所と言われていた『エクソリア大聖堂』。

「く、クマ吉さん。今日は遅れてないよ！」

「誰？」

「カナダだよ！」

「一時間モ前二到着シトイテヨクソソナ事言ウナ」

「まあ、遅れようもないよね。昨日はシャスランさんの家に泊めてもらって、今日も起こしてもらったんだもの」

シャスランとカナダの仲は良好なようです。

「あれえ、もう来てる奴が居るのかい？」

早く来たと思っただけどねえ……」

不意に響いた声。

そんなに大きな声じゃないのによく通る声だった。

「…集合時間の一時間前だ。」

来ている者は来ているだろう」

「そんなもんかねえ……」

そんな会話をしている二人に、カナダは少々戸惑いながらも問いかけた。

「えっと……日本さん……と、ロシアさん……？ですよね？」

セミロングのおかつぱ頭に和服の日本にそっくりな顔をした男は、パンツと扇子を開いた。

「いいやあ？」

あたしは『本田桜那』。まあ、菊…日本と一緒に『大日本帝国』をやってたよ。

こいつは『ソビエト連邦』だ。

名前は『アレクサンドラ』、サーシャやアークと呼んだらいい」

扇子で隣のロシアそっくりの男を指す。

「あ…すみません」

「謝るほどのことじゃないよ。まあ、少し嫌だけど」

さて、と桜那はテーブルに座る。

「カナダ…だったね。あんた、チェスは出来るかい？」

「え、はい。多少なら」

「じゃあ、暇つぶしに相手をしてくれないかい？」

あたしに勝てたら、何でも言うこと聞いてあげるよ？」

「はあ…（後半はともかくとして）別にいいですけど」

テーブルにチェス盤を広げる。

そして、チェスを始めた桜那の後ろからアークが声をかける。

「…いいのか？そんな約束をして」

「大丈夫だよ。問題はないさね」

にっこりと桜那は笑った。

アークは黙って、小さく頷いた。

午前、九時四十分。

「ロシアー、あれ買うですよー」

シーランドと一緒に手を繋いでいたロシアに屋台のお菓子を指さして言う。

「いいけど…」

シーランド君は僕と一緒に居てもいいの？
パパやママに怒られない？」

財布を取り出しながらロシアが訊く。

「別にいいですよ。」

シー君にだって友達を選ぶ権利ぐらいありますですよ」

シーランドが微笑みながら呟く。

「ロシアは悪い奴じゃないですよ」

言いながら、シーランドは思う。

（ただ、子供だけです。

シー君みたいに、悪いことをしたら「ダメ」って言うてくれる人が
いなかっただけなのです。(

ロシアはシーランドに引つ張られながら、集合場所に向かって行っ
た。

「やれやれ…彼女も、無茶をしますね」

闇のような男が居た。

黒い短い髪をした、まだ若い男だった。

漆黒のローブを体に巻き付け、まだ遠い聖堂を見つめている。

「さて、私も向かいますようか」

そんな事を言つて、悠々と男は聖堂へ向かつて歩き始めた。

2：騎臺ク

午前、十時。

『エクソリア大聖堂』内。
集まったのは、

・イタリア、ドイツ、日本の枢軸組。
・イギリス、アメリカ、中国、フランス、オルトの連合 - 1 +
・カナダ、桜那、アークの早く来た人達。
後集まった人達は、
アイスランド、
トルコ、
シーランドとロシア、
オーストリア、
ハンガリー、
プロイセン、
ローマノ、
リトアニアとポーランドだった。

「…これだけ…ですか」

誰にも聞こえないくらい、小さな声でシャスランが呟く。

「……では、皆さんにはこれからこの地下遺跡に行ってもらいま
す」

「何で？」

「…RPG見たいなものですよ。ただのお遊びです。
地下遺跡　ダンジョン内では魔法も使えます。
武器も、こちらから支給します。」

ダンジョンの一番奥、お姉ちゃん…カムランが待っています。彼女から『ある物』を受け取ればその人が優勝です」

淡々とした。否、無理に感情を抑えているような声。

「ある物って何だ？」

「私も知りません。お姉ちゃんが決めてしまったので」

皆、突然のことに困惑し、同意しかねていたが。

「面白そうじゃないかい」

ニヤリと、桜那は笑う。

「で、組分けはどうなるんだい？」

「ダンジョンへ飛ぶ時、ランダムに振り分けられます」

「へえ…で、商品とかあんのかい？」

「まあ、一応」

「……じゃ、あたしは参加してみようかね」

近くのコンビニにでも行くような、そんな軽い口調だった。

「ちょ、ちょっと桜那！何、あっさり決めてるんですか！」

「いいじゃないかい。面白そうだしねえ。」

な、サーシャよ」

「ん…桜那が言うのなら、私も参加しよう」

「サーシャ!？」

「大丈夫だ」

声を荒げたロシアに、アークは一瞬だけ微笑んだ。

「シヤスランは、無闇に誰かを傷つけたり、しない」

その言葉に、シヤスランの瞳が揺れる。

けれど、何も言わなかった。

誰もが不安や疑心から、戸惑っている中一人楽しそうに手を挙げる少女が居た。

「私参加しますっ」

「オルトがやるんなら、僕もやるですよ！」

「…僕も、参加します」

オルト、シーランド、カナダが参加をするという。

小さなため息をついて、フランスも手を挙げる。

「カナダが行くなら、お兄さんも行くよ」

「俺もやるんだぞ！」

「だったら俺も」

「我也行くある」

「皆行くの…？…だったら、僕も行くよ」

連合は全員行くと言った。

その後、数分の問答の末、全員参加が決まった。

「それでは、皆さん。ご武運を」

床が光り出す。
巨大な魔法陣だ。

「あー、そう言えばあ」

ダンジョンに飛ぶ瞬間、オルトが言った。

「泣きたいなら素直に泣くといいですよお。」

それに、文句があるならぶつけたらいいですう」

真っ白な光に包まれ、皆は姿を消した。

誰も居なくなつた聖堂の中、シャスランは膝から崩れ落ちる。

「分かつてる…分かつてるよ…うううううううう…うううううううう…
…うううううううううううう」

お姉ちゃんが、何をしたいのか、何のために何をしようとしているのか。

何も分からない。

何も知らない。

何も、教えてもらえなかった。

いつだって、お姉ちゃんは何も教えてくれないんだ。

私は、そんなに信用ないですか？

シャスランは一人、暫くむせび泣いた。

「……相変わらず、彼女も残酷ですね」

漆黒の男が聖堂の入り口、扉に凭れかかり、中から聞こえてくる泣き声を聞いていた。

「さて、私はどこから入りましょう」

困ったように笑う男の前に朱色の髪の大男が、居た。

本当に、そのまま『来た』のでも『現れた』のでもなく、ずっとそこに居たかのように。

漆黒の男は瞳を開き朱色の男を見る。

「おや、貴方は……」

すうつ……と朱色の男がどこかを指さす。

漆黒の男は微笑み、その指さされた方向へ歩き出した。

「久遠くおんの思い、ですねえ……」

オルトは小さく呟いた。

七色に光る空間。

落ちていく。

自分以外は誰もいない。

きつと、ワープの途中なのだ。

「あなたは、誰ですかあ？」

誰ともなく、否、この迷宮ラビリンスの最奥にいらっしゃるであろう悲しい女に問いかける。

「あなたは、誰を思って、誰の為に泣いているのですかあ？」

答えは、なかった。

2：翳臺ク（後書き）

久遠^{||}長く久しいこと。遠い過去または未来。

ある事柄がいつまでも続くこと。永遠。

3：徘徊セシ者タチヨ

地面が迫ってくる。

アークは空中で数回転し、勢いを殺してから着地した。周りを見れば、薄暗い石造りの廊下だった。

「ラビリンズ迷宮…か」

誰にともなく呟いた時。

「ヴェエエエエエー……！！！！……？？」

「何これ、マジ意味分からんし……！」

「ちょ、ポー暴れないでよ！」

上から降ってくる声。

「あ……」

気付いた時は遅く、アークは三人の下敷きになっていた。

痛みと重さに顔をしかめると、イタリアが泣きそうになりながら大声で捲し立てる。

「ヴェー！ごめんねごめんね、下敷きにしちゃって痛いよね！怒った！？何でもするから怒らないでえええー……！」

「え……いや、別にいい。…出来れば、早く退いて、欲しい……」

「うん、ごめんね！本当にごめんね！」

謝るイタリアに少し困りながらも、アークはあとの二人に声をかける。

「大丈夫、か？」

「ええ…なんとか」

「マジありえんし…」

半泣きで愚痴を零すポーランドを慰めながら、リトアニアはアークと話を続ける。

「俺とポーランドとソレ…アークとイタリア君かぁ。戦力としてはイマイチですね」

「まあ、何か出たら…私が、全てねじ伏せる……」

「……すみません。頼りにしてます」

「うん」

どことなく寂しそうなアークとそんなアークを気遣うような素振りのリトアニア。

（あれ？）

一瞬、イタリアは違和感を覚えた。

微かな、本当に小さな違和感。

（なんか、おかしい…）

そんな思いもすぐに雲散霧消して、無くなってしまった。

微笑みを湛えたリトアニアはポーランドの手を引いて歩き出す。

「行きましょう、止まってもいい事ないみたいですし」

後方から、何かが石の廊下を歩いている音がした。

しかもどンドン四人に近づいて来ている。

「そうだな……イタリア、走れるか？」

「うん」

「よし」

四人は一直線に音とは反対方向へ走りだした。

「「うわあああああああああ！！？」」

シーランドとロシアが折り重なるように落ちて来た。
落ちた所はお城の中庭のような、簡素だが美しい場所だった。

「いたた……」

「お前と一緒にかよ……」

「あれ、トルコ君。僕と同じチームなんてついてないね」

「僕もついてない」

「アイスランドもいたですか」

何やら壁を触って何かを調べていたトルコと噴水の残骸に腰掛けて
いるアイスランド。

どちらもロシアと同じチームで嫌そうな顔をしている。

「うふふ。僕はラッキーだったかもね。で、トルコ君は何をしてる
の？」

「この遺跡がどれぐらい前のもんか調べてたんだよ」

流石は古くから栄えた歴史ある国、そんなことも分かるらしい。けれど、トルコの表情は暗い。

「おじさん？どうかしたの？」

「…こいつは、千年二千年前のもんじゃない。…もつと古い、紀元前を超える。…数万年前のもんだ」

「なにそれ…それって」

四大文明以前ってこと？

そう訊くアイスランドにトルコは表情を硬くしたまま答えない。

「ま、何でもいいですよそれにほら、ぼんやりしてると」

軽く言うシーランドの掌から水の塊が発射され、アイスランドを掠めて、後ろへと着弾する。

「ちょっと、なにす　！？」

後ろを振り返ったアイスランドは絶句した。

そこには、今のシーランドの攻撃で倒されたのであろう、牛ほどの大きさがある山猫が、びくびくと痙攣しながら倒れていた。

「…こいつぁ…」

「皆気をつけて！囲まれてるよ！」

いつの間にか、大量のモンスターに囲まれていた。

「これが、シャスランの言っていたダンジョンの魔物と魔法ですか。なるほど、使い方は分かったです」

にやんつ、とシーランドは笑う。
両手を広げた。

「海よ！母なる海よ！我は海の子！大海を統べし！彼の者の血を継ぎし者ツ！我に力を！」

シーランドの体が青白く輝く。

「皆あ！伏せるですよお！」

オーシャンス・ロアー
“Oceans roar” ツツ！！！！”

シーランドの周りから大量の水が噴き出し、津波のようにモンスターたちが襲った。

その光景に三人は呆然とするしかない。

なんだこれは。

なんだこれは。

これは、なんだ？

こんなの、本当に魔法じゃないか。

意味が分からない。

目的は、何？

こんな喜劇を演出したのは、

作り出したのは、

一体誰だ？

「まったく、何なんですか！？こいつら！」
「お黙りなさい、ハンガリー！やられてしまいますよ！」

まだ扱あつかい慣れない魔法を使いながら、ハンガリーとオーストリアの二人はモンスターと交戦していた。

「いきなりこんな危ないことに巻き込まれて…戻ったら、ただじゃおかないわ…」

そんな物騒なことをハンガリーが呟く。

その時、ハンガリーの死角からブラックドックが襲いかかった。

「しまシュトラールっ」
「Strahl!!」

白銀の光線がブラックドックを貫き、近くにいたモンスター共々吹き飛ばした。

「お前ら、大丈夫か!？」
「プロイセン…!フランスも」
「話は後だ!フランス、結界張れ!」
「了解!」

フランスが、己とオーストリアとハンガリーを囲む結界を張る。
一人、プロイセンはその結界の外で目を閉じる。

「ちよつ、プロイセ…」

「天に座す我らが神よ！」

ハンガリーの言葉を遮り、プロイセンは大きく詠唱を唱え出す。凜々と、その言葉を言い慣れている様だった。

「天に座す我らが主よ、私に力を！あらゆる闇を退ける、光の刃を私に！」

フエーゲフォイアー・クロイツ
“煉獄の十字架”！！！！」

地面に白銀に輝く十字架が現れる。

「フランスFlamme！」

瞬間、十字架から同色の焔が立ち上がる。焔がモンスターたちを焼き尽くす。

「なんです…これは」

「あいつ、一体…何なの…？」

驚きを隠せない二人にフランスは言う。
「どこことなく、悲しそうな声だった。」

「そりゃ、そうだよ。凄いのも、強いのも、恐ろしいのも、美しいのも、当たり前だよ。」

あいつは『プロイセン公国』。神を崇める教会から発生した国。光魔法ならだれにも負けない。
けど、それ以上に。

あいつは神に愛され、悪魔が忠誠を誓った。

“ギルベルト・バイルシュミット”なんだから」

血飛沫が舞い、

断末魔の咆哮、

肉の焼ける匂い。

そして、死臭。

そのあらゆる不浄の中に立ちながら、プロイセンは、

あまりに美しかった。

「なんなんだよ…こいつら」

襲って来たモンスターの肉片を投げ捨てて、血塗れのアメリカはイギリスに近づく。

「君、分かるかい？」

「……さあな。俺の声は届かなかった。知能が無いのかもしれない」

ズタズタになった肉の塊を見ながら、イギリスが呟く。

口ではそっぴいながら、別のことを考えている様だった。

「イギリスさん…？大丈夫ですか？」

「あ…？ああ、大丈夫」

「…ここ、シャスランはダンジョンと言っていたな」

「ええ、確かにそう言っていました」

「……周りを見て見る。これは、一体なんの冗談だ……!?!」

ドイツが言うようにここは明らかに待ちの地下なんかでは無かった。生い茂る木々、脈々と伝わる生物の鼓動。空は青く、高い。

「魔法なんだ。人間世界の常識は通用しねーんだよ」

「随分と……余裕ですね、ローマノ君」

「……まあ、慣れてるから」

それだけ言って、普段なら泣きだしそうなものなのに、ただ静かにイギリスに近づいて行った。

「……なあ、昔この世界には一人の神様が居ただってさ」

「……?」

「その神様は、別の世界から来た神様で、この世界にはまだ生物がいなかった。

それが寂しくて、神様は動物を作った。

それから、土から人間を作った。その人間をアダムって名付けた。

そのアダムの骨から、今度は女を作った。イブと名付けた」

創世記。

キリスト教に伝わる、世界と人間の始まりの話。

けれど、どこか違う話だ。

「神様には娘が居た。

アダムとイブはその遊び相手だったんだってさ。

ある時、優しい蛇がイブに林檎を食べさせた。彼の心中は解らないけれど、その所為で二人は楽園を追い出された。神様は嘆き悲しんだ。娘はそれを慰めた。

娘は神様と共に暮らした。けれど、神様はこの世界から居なくなっ
た。

娘は楽園に一人残された。

娘は世界の神になった」

神様の娘。

そんな話は、聞いたこともなかった。

「お前 何を知ってる？」

そのイギリスの問いに、ローマーノは無表情に続けるだけだった。

「楽園は、随分前に地殻変動で沈んでいる。多分、このジャングル
はその沈まなかった楽園の一部だ」

それで、ローマーノの話は終わった。
全員、混乱していた。

突然、世界だの神様だの言われて、混乱しない方がおかしい。

「ローマーノ、それは、一体なんの話だ…？」

「そんな伝説みたいなこと…信じるとでも…？」

「俺も、信じられないんだぞ」

「俺も信じることは出来ねえ……」

そう言う四人にローマーノは冷静な視線を向ける。

否、見下すように。見下げ果てるような、そんな冷たい視線。

「話した俺がバカだったな」

くるとロマーノは踵を返し、歩き出す。

「シャスランのことだ。多分、お前ら死んだりはしねーだろ」

「ロマーノく…!？」

ロマーノ姿が消えた。

崖から、飛び降りたのだ。

そのまま、ふわりと羽でも生えているかのように落ちていく。

トンツと軽い音と共に地面に着地する。

上を見上げる。ゆうに50mはある断崖絶壁。上にいるイギリス達はもうほとんど見えない。

ゆっくりと歩き出す。

一歩一歩、確かめるように。

「チクシヨー…」

何故だか、とても苛立った。

『僕ねえ、子供がいるの』

『女の子と男の子』

『女の子の方は人間だったから、もう死んじゃったけど』

『男の子は、君達と同じ存在だから』

『もし、いつか会うことがあったら』

『優しくしてあげてね』

『ああ』

『会いたいなあ…』

「優しくなんて、してやれねえぞ。このやろー」

そっだ、思い出した。

あの夢に出て来た人は、“アトラス・フォン・グランファン”。
この世界の

孤独な女神。

「次はこの部屋かね」

一つ一つ、城の部屋を調べていた桜那達。

妙に広い部屋の中央まで歩いて行って、桜那は違和感を覚えた。

「なんだい、この部屋」

かなり広い長方形の部屋、壁には長方形の黒と灰色の紋様が描かれている。

「ええ、おかしいですねえ」

ふわふわと、天井近くを浮遊していたオルトが桜那の隣に降りて来る。

「ああ、綺麗すぎる」

「ちゃんとして、毎日掃除とかされてるみたいな感じですよ」

今まで見て来た部屋とは明らかに違う。塵一つ落ちていない部屋に、桜那達は若干の気持ち悪さを覚えた。

「あ、二人とも着てください!」

壁を調べていたカナダが二人を呼ぶ。

その手には一つの石板が握られていた。

「壁の灰色は全部石板です」

「これ全部が…」

何千、否、何万枚もあるだろう。

これだけの石板に一体何が綴られているのか…

「古代文字…ギリシア…いや、くさび文字…?」

「いいえ、もっと古いです。きつとこの遺跡の歴史でしょうね」

「調べたら何かの足しになるだろうけど、だからと言って調べてる

時間はないねえ……」

「はい。一枚解読するのに数日かかるでしょう」

「じゃ、無理だね」

あっさりと背を向ける桜那。

持っていた石板を壁に戻すカナダ。

「さて、じゃあ自力で探索ですねえ」

楽しそうに笑って目を閉じるオルト。

空気が凜と引き締まる。

数分間の果てしない沈黙の果てに、オルトは目を開き出入口へ向かって歩き出した。

「ここを出て、左に行くはずと奥に大きな部屋があります。そこにライオンを模った壁画かたどがあります。そのライオンの目を押すと会談が開いて地下へ潜れます。」

そこから先は、また下で」

「便利な能力だよねえ」

「助かります」

そんな事を言いながら、二人はオルトの後をついて行く。

「この部屋の事は、ゴールしてからカムランさんにも聞きましよう」
う」

一歩、部屋の外に出るとそこには血走った眼をしたモンスターたちが群がっていた。

「おやあ？」

「くつくつく！」

「うわぁ……」

オルトが両手をかざし、

桜那が刀を抜き放つ、

カナダはクマ次郎を抱きしめた。

たった、それだけ。

たったそれだけで、数百体のモンスターが消し飛んだ。

男が居たのは王の間。

長い中央の道を男は静かに歩く。

目線の先には玉座。

そこには水色の髪をした少女が座っていた。

眠っているのか、目は閉じたままだ。

目元には紅い刺青。

玉座の後ろのステンドグラスから差しこむ七色の光が、少女の顔に影を落とす。

男は無言のままその玉座を通り過ぎた。

3：徘徊セシ者たちヨ（後書き）

プーちゃん最強伝説（笑）。って、笑えないか…
ロマーノ…おま…なんか壮大になってきたぞ…？
オリキャラ達のもじゃぱり様がパないな…
まあ、仕方なし。

最後の男は漆黒の男です。

4：絡ンダ手（前書き）

所謂、リトの洞察力が凄いよね。っていう話。

4：絡ンダ手

「ここまでくれば…大丈夫、かな？」

「ああ…」

「大丈夫？ポ？」

「大丈夫じゃ…ないし…」

かなりの距離を走って逃げてきて、全員疲れているようだ。無理もない。音がするたびにそこを迂回してきたのだから。今いるところを、城の塔のような場所の一室だ。ぐったりと、リトアニア以外の三人は傍にあったソファに座る。

「どしたん、リト。お前も座れだし」

「いやいや、皆警戒心なすぎでしょ。何でソファがあるの？」

「あ…」

「なんでだろーねー」

「もっと真面目にしようよ！」

ぴくつと一人反応するアーク。

「あ、別にアークの事じゃないですから。

とりあえず、皆に話しときたい事が3つあるんだけど」

指を三本立てて、皆を見回すリトアニア。

「一つ目、さっきの足音の事なんですけど。

あれ、人間だったかもしれない」

「何で？」

「何でって…だって、靴音だっただろ？靴を履くのは人間だろう？」

動物なら裸足だし、もし何らかのモンスターだったとしても、靴を履くモンスターを俺は知らない」

「確かに…」

納得したように頷くアーク。

「で、二つ目は？」

「このチーム分けについて。役割で分けるなら、俺は中距離、ポイヤタリア君は遠距離…後方支援だよ。接近戦担当はアークしかない。圧倒的に、攻撃力が無さ過ぎる」

「……頭のいい、シヤスランの采幣さいはいとは思えないな…」

「うん、俺回復は出来るけど攻撃は出来ないし…回復にも限界があるしね」

二人の言葉に頷いて、リトアニアは神妙な顔で言う。

「つまり、このゲームには彼女以外の力が加わっているということだよ」

ますます、分からなくなる。

シヤスランが考え、実行しているゲームならよほどの事がない限り、危険はないものだったはずだ。

だが、そこに他の力が加わっていると、危険が危険として姿を現す事になる。

油断が出来ない。

「で、最後の一個はなんなんよ？」

「このゲーム自体について」

根本的な、謎。

目的は？

理由は？

人選は？

三人はリトが上の中の何かを考えたのだろうとそう思った。
その通りにリトアニアは。

「どうして、こんなゲームをしたんだろう？」

何か目的があるとしたか思えないけれど…」

「魔法を与え、モンスターの数にぶつけ、何をしたいか…」

「単純に、モンスターの数を減らしたんじゃないか？」

そのポーランドの言葉にはイタリアが否定した。

「それはないよ。」

俺達に力を与えてやらせるのに、相当な魔力を使うはずだもの。
それなら、自分で、自分たちでやった方がいい筈だよ」

「その通り…彼女には、カムランさんがいる」

ぴくっと、全員が反応した。

カムラン。

その名を聞いて、反応しない欧州の国はないだろう。
…よほど若くなければ。

千年ほど前、現シャスランの在る場所から急激に勢力を伸ばした国。戦争帝国カムラン。

“彼女”の国はそう呼ばれた。

戦争によって一時代を築き、戦争によって滅んだ国。

本島を始め、

イングランド・ウェールズ、

フランスの大半、

ベルギー、

オランダ、

ドイツの東北地方、

果てはのルウエーやスペインの一部までも支配した巨大帝国。

何故、滅んだのか詳細な記録は残っていない。

だが、イギリスを中心として連合王国に敗れ去ったのは間違いない。しかし。

彼女は、消えてはいない。

未だ、妹であるシャスランに存在し、力を持っている。

力を持って 隣国を牽制してきた。

いつでも、復活できるぞとも言つように。

「彼女がいれば、モンスターの千や二千、楽に減らせるでしょう」

「確かに…」

「じゃあ、リトアニアは何でだと思ったの？」

「有力な説は、カムランさんが何らかの理由で手が出せないから俺達を使っている。」

それが一番自然な考えだ。魔法があるなら呪いもあるだろうし。やっぱり、目的は解らないけど。

もう一つは、俺達に何かを知ってほしい。とか」

「何、か…？…遺跡…歴史…魔法…存在…？」

「どれも良く分らんし…」

「単純に人手が欲しかったんじゃないかな？」

唐突にイタリアがそう漏らした。

驚いた顔をして、イタリアを見詰めるアークとリトニア。

「あ…えっとね、自分達じゃ手が足りないから、俺達に手伝ってもらいたかったとかじゃないかな…。って…」

「やっぱ、違うよね」

「いや…あり得る、話だ」

「そうだね。もしそうだとして、何をは探して欲しいのかな？」

「お宝とかじゃね？」

ドガツツ！！

「「「「！！？」」「」「」

扉が、外側から激しく叩かれている。

「な、何か来たし！」

「皆、構えて！」

「だあああああああ！！メンドクセエえええええ！！！！」

そんな絶叫と同時に分厚い石の扉が門かぬぎごと内側に吹き飛んだ。
物凄い誇りと土煙が舞う。

「ちっ！何だっつーんだよ、まったく…」

舌打ちをしながら、ずかずかと入ってきた男。

長く流れる紅い髪。

細められた金色の瞳。

驚くほど背が高い。

古風な、布を一枚巻き付けただけのような服。

頭には金と銀でできた美しい冠。

「おいてめーら」

無遠慮な、低いテノール。

「何、人の城に勝手に入って来てやがんだ」

「……………え？」

4：絡ンダ手（後書き）

うふふふふ…

リトとイタちゃんが凄い話。

ポーが何度か、ステレス発動しそうになった（笑）

次はロツ様達チームの話ですよ。

5：視界が歪んで揺レタ理由（前書き）

好きなんですよ…シー君。

サブタイ：『雲の空耳と独り言 + 『様
「片目が見えない 5題」より

5：視界が歪んで揺レタ理由

「みんな、急ぐですよ」

シーランドが皆を誘導しながら、迷いなく駆けていく。

「…シーランド君、もしかして道…分かってるの？」

恐る恐ると言う風に聞くロシアを、シーランドは数秒横目で見たのち。

溜め息。

「そんな訳、ある訳ないじゃないですか」

「そ、そうだよね…」

「じゃあ、どこに進んでる訳？」

「何か、俺も嫌な予感がするんだけどよ」

曲がり角を曲がった瞬間、シーランドが足を止める。

「ひっ」

アイスランドが小さく悲鳴を上げた。

それもその筈、そこには威風堂々とした深紅のドラゴンが鎮座していたのである。

「ファイアー、ドレイク…！」

「“爆炎の巨竜”…！なんだよ、これ…！レベルが違いすぎるぜえ！？」

（大きい…かなり、古い竜ですね）

三人が畏怖と恐怖を覚える中、一人、シーランドはそのドラゴンを見上げる。

《 久しい》

ドラゴンが声を発した。
重々しく、恐ろしい、人々に恐怖を与える絶対的な王者の声音。
けれど、どこか優しくもあった。

《ここに、そなたらの様な者達が足を踏み入れるのは…》
「…て、ことはここには昔も誰かが来たってことですね…」
《そうだな…だが、随分と、人の声を聞いておらなんだ》
「ここが、どこだか教えてもらえますですか？」

刺々しい首を持ち上げ、シーランドに近づける。
匂いを嗅いでいるのだろうか。
瞼が閉じらる。

一体、何を思ったのか。
もう一度、翡翠の瞳が開かれた。

《 良かろう。》

ここは、古都・ルヴィニ。
アトランティスと呼ばれた国の心臓部…》

まるで、老婆が孫に昔話を聞かせるような、そんな声。

「アトランティス？」

シーランドが聞き返す。

振り返り、まだ硬直しているトルコに問いかける。

「確か地中海にあったっていう巨大帝国ですよね？」

「あ、ああ。でも、そんなモン実在したかどうかもわかんねえぞ！
？」

《しているだろう。今、そなたらが立っている地がその地だ》

当たり前のように言い、それから思い出したようにドラゴンは付け足した。

《今は誰もいない。

デオス（神）が造りそこなった、知能を持たぬ者たちとその子孫。
私の様な、老害が多少未練がましく残っているだけだ》

ドラゴンが唸った。

三人が戦闘態勢に入る。

しかし、ドラゴンは笑っていただけだった。

「誰もいないですか？」

《ああ》

「ふっん……」

あまり興味なさげに、シーランドはドラゴンに背を向けて歩き出す。

「貴重な情報をありがとうございます」

みんな、行くですよ。
あっさりとシーランドは行ってしまった。
それを三人も戸惑いながら追う。
ドラゴンは、それを薄く開いた目で見ていた。

《本当に久しい》

アイスランドの耳にそんな咳きが聞こえた。
誰にともなく発した、独り言だったのだらうけれど

《おお、息子よ。そなたの子孫が来たえ…》

その寂しそうな声に惹かれ、振り返ったアイスランドの目に映った
のは、

虚空を見上げ、涙を流すドラゴンの姿だった。

ドラゴンから離れて、四人はどんどん奥へ進んで行っていた。
アイスランドが立ち止まった。

「ねえ、シーランド」

「なんですか」

前を歩いていた三人も立ち止まる。

「僕は、怖いよ」

「…僕だって、怖いですよ」

「違う、そうじゃないんだ」

アイスランドが立ち止まる。

自分で自分の肩を抱き、小さく震えている。
それでも目だけはしっかりと、シーランドを見つめて。

「僕は、君が怖い…」

「アイスランド君…」

「坊っちゃん、それは…」

「だって……だって、おかしいじゃないの!」

アイスランドは叫んだ。

恐怖や怯え、得体も知れない物の傍にいるかもしれないという思いから。

「何で、君は魔法が使えるんだ!

何で、この場所に違和感を覚えない!

何で、ドラゴンと普通に話せるんだ！
何で…何なんだよ！

君は一体何なんだよ！！」

その悲痛な絶叫にシーランドは、振り返り。

彼とは思えぬほど、感情を欠いた無表情。

その双眸そうまから、静かに雫を零しながら。

驚く三人に、その表情と同じ様に感情を欠いた、けれどどこか泣いているような声で。

シーランドは答える。

「海の民」

それが、僕達の名前です。

起源はアトランティスにあるそうです。

アトランティスは海に浮かび、海を敬い、海と共に生き行く国。

その子孫は、国の消滅と共にヨーロッパ全土へ散らばり、世界中に広がりました。

あまり知られていませんが、赤い髪を持つ人は、アトランティスの直系なんだそうです。

僕の、『シーランド公国』の起源は、イギリスです」

元々が、イギリスから分離した国。

国とも呼べぬ、土の土地も無ければ、育む草木も無い。

けれども、彼は国と名乗る。

国と呼ばれば、国となるから。

「イギリスには、ケルト民族の子孫である赤毛の人々が沢山います。

その中にも“海の民”は混じっているそうです。

だから、イギリスには魔力を持った人が多くいるのです。

僕は、偶然にもその記憶を持っていますです。

記憶と言つか、情報ですけど、少しだけ。

それに、よくオルトに連れられて変なことに巻き込まれていますし。

だから、特別驚きもしなかつたんです」

ごしごしと涙を拭い、笑う。

やっと、笑えた。

「ごめんなさいです。黙っていて。けど、話すのはとっても辛い事
だつたんです。

すぐくすぐく、辛かつたんです。

あの人は、辛くて仕方なかったんです」

「あの人？」

「…トルコは知ってるですよね。」

アトラスという、女の人ですよ」

瞬間、城が震えた。

5：視界が歪んで揺レタ理由（後書き）

シー君を淒くしたかっただけの話。

トルコさん、好きだけど口調が分かんなくて、話さないの空気…

ロツ様も話さないし…

アイス君の口調ってあってるのかな？

そう言えば、にーにが消失するとう…

初期の時にいなかったから、本当に忘れてた…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0077x/>

消失の国～誰かを捜すRPG～

2011年12月11日12時52分発行